

秋、読書を愉しむ。



辞書で「書籍」を引くと、「個人の知識の源泉となり、生活を豊かにするものとしての」本、とある。読書に最適な秋、心の栄養を満タンにして、豊かな人生の旅路につこう。

読書の秋、心の栄養を満タンに ①

あらためて大切だと思う、本に慣れ親しむこと。

●読書は豊かな心を育て 夢を膨らませる

昨年8月20日に開催された阿南市子ども議会で、馬見恵理子議員（新野小学校代表）からの「明るい学校づくりのために、児童1人ひとりの心を豊かにする読書が大変有効であると思えますが」という質問に、1冊の本を持ち出し、新居教育長はこう語った。

「私が小学6年の時、『だれも知らない小さな国』（佐藤さとる著）を読みました。今にも、本の中から小人のロボットが飛び出してきて話しかけてくるんじゃないか。部屋の至る所にたくさん的小人がいるのではと、思わず振り返るほど物語に入り込み、現実にはあり得ない空想の世界に浸ったのを感じています。

物語を楽しみ、ファンタジーの世界を楽しむことは、『愛やまごころ』など人の気持ちを感じる力につながります。コミュニケーションでもっとも大事な力です。いろいろな本

秋、読書を愉しむ。



を読むことで、今まで知らなかったことが分かるようになり、あんな人になりたい、あんな所に行ってみたい、という理想や夢を抱きつかけにもなります。また、ハッピーエンドで終わる物語が大部分である絵本は、困難を乗り越える大切さを知ることにつながります」と。

自らの経験に基づき、読書は人の心を育て、夢を膨らませてくれる大切な行為であり、人格形成に大きく作用するという。

●読書は、学力の向上と市民性の形成に大きく作用する

文部科学省が2014年に実施した全国学力・学習調査の結果で、読書をする子どもほど学力が高い傾向にあることが分かった。小学校では「読書が好きですか」という設問で「好きです」と答えた児童は、「嫌い」と答えた児童より国語・算数の知識・活用すべてにおいて平均正答率が7点〜14点上回る結果であった。中学生もほぼ同様の結果だった。読書をする子どもほど学力が高い傾向にあることについて、新居教育長はこう分析している。

「読書の習慣が定着すると、本（文章）を速く読めるようになります。いわゆる『速読』です。限られた時間で文章の要旨をまとめる力をつけるのに必要な要素です。さらに、語彙力・表現力が豊富になり、読み取ったことやそれに基づいて考えたことを目的や条件に応じて、話したり書いたりして伝え合うことができるようになります。ひいてはどの教科においても無解答率が低くなり、学力の向上につながっていきます。

また、本市の多くの学校が取り組んでいるNIE（English as a Foreign Language）（学校等で新聞を教材にして学習すること）を実践することによって、単に新聞で知識を得るだけでなく物事を多面的に見て、自分の意見を論理的に組み立てるなど、総合的な

学力アップも期待されます。このように、自分たちが生きている社会で何が起きているかに目を向けることは、将来、市民社会を形成する上でも市民に不可欠な資質になると考えます」

ところで、小中高校生の読書の実態はどうなのか。2013年10月27日に公表された「第59回学校読書調査」の結果では、同年5月の1カ月間に読んだ本の平均冊数は、小学生が10・1冊、中学生が4・1冊、高校生は1・7冊で、いずれもここ数年、高い数値を維持している。子どもの頃の読書環境については、就学前の家庭による読み聞かせで「よく読んでもらった」と答えた小学生は49%、中学生は36%、高校生は39%と、同じ質問をした2008年に比べて増加した。小学校低学年時に学校で読み聞かせをしてもらったかについては、「よく読んでもらった」「ときどき読んでもらった」との回答が、小中高とも7割弱に達し、家庭や学校における読み聞かせが広く行われていることの効果がうかがえる。

「本市では、おはなしボランティアの皆さまが中心となって、学校や図書館で幼児から中学生に至るまで読み聞かせが行われ、子どもたちの大きな楽しみのひとつとなっています。今後とも、家族をはじめボランティアの皆さまにはご支援をお願いしたい」

人から人へとつながる、 読書活動に込められた思い。

●本と子どもの架け橋に

早い時期に読書が習慣化すれば、それは一生変わらないといわれている。子どもの頃に本に慣れ親しむ機会を与えることが重要であり、読書の大切さや楽しさを伝える取組では、多くの読み聞かせボランティアが活躍している。

本市では、平成16年8月から4カ月健診の際に「ブックスタート」を行っている。ブックスタートとは、赤ちゃんに「地域が子育てを応援している」というメッセージを伝えながら、絵本を手渡す子育て支援活動である。文字を早く覚えるという早期教育ではなく、絵本を介して親子が心と心を通わせ、かけがえのないひとときを持つてもらおうのがねらい。健診の待ち時間を利用して、ボランティアの方が優しく読み聞かせをして、すべての赤ちゃんに絵本をプレゼントしていく。保護者には「子どもの心の成長につながる」と好評だ。

●手書きPOPで 本との出会いを演出

人と本との関わりは、成長段階に応じて変化していく。社会を知り、人生について考え、希望や夢を抱き始める中学生にとって、1冊の本との出会いがその後の人生に大きな影響を与えることもあり、多様なジャンルの本に興味を持つことが大切だ。

県立富岡東中学校では、国語の教科書に掲載されたものを中心に「中学校3年間で読みたい本100冊」を選定し、そのリストを入学時に渡して読書を推奨している。阿南市中学校教育研究会図書館教育部会長で、同校教諭の井内 幸さんは、「リストの配布は、多様なジャンルの本に出会わせ、充実した読書生活を経験させるのがねらいです。すべての学力の根幹をなす読解力、思考力は、活字を読むことによ

秋、読書を
楽しむ。



個性あふれるPOPから、図書委員の肉声が聞こえてきそう。



POPづくりに励む富岡東中学校の図書委員の皆さん。読み手の心をつかむPOPは、この笑顔から生まれる。

読み聞かせは、保育所や幼稚園でも日常的に行われている。10月16日、橘こどもセンターで、阿南第二中学校の生徒による読み聞かせが行われた。生徒たちは、夏休みに作った絵本を使い、園児に語りかけるように読み上げた。見ることは、聞くこと、感じること、わかることは、読む人との関わりの中で育まれ、ひいては読む力につながる。本に親しむ環境の充実が、豊かな知性や感性を育む土台になっている。



1健診の順番を待つ親子に絵本を読み聞かせるボランティアスタッフ2ブックスタートで配られている絵本3手作り絵本を橋こどもセンターの園児に読み聞かせる阿南第二中学校の生徒たち。ちょっぴりはずかしく、でもどこかうれしくて…。将来の中学生に読んであげることで、やりがいも倍増する。

こうした取組は小学校でも盛んだ。富岡小学校では、毎週火曜日、全クラスを対象に朝の15分間、「おはなし広場」を行っている。保護者やOBが、図書館などから借りてきた絵本を持って、情感豊かに読み上げ、児童を物語の世界に引き込んでいく。代表の滝根佳世さん(富岡町)は、「読み手の個性を発揮しながら、自然のすばらしさや人と関わり、生き物とふれ合う大切さを伝えていきます。15分という短い時間ですが、その積み重ねが、みんなの一生の財産になると信じています」と、熱心に活動を続けている。



て養われます。また、読書には視野を広げ、心の成長を促す重要な効果が期待されます」と話している。こうした学校側のアプローチに加え、効果を上げているのが、図書委員による手書きPOPだ。出版社が制作したものよりも温かみのあるPOPが、読書意欲を促す。物語をイメージしたイラストを添えたり、「とても心あたたまる一品です」と紹介を書いたり、図書委員の感性が光る。本選びのヒントとして、図書室に欠かせないものになっている。

●本と出会い、 本と過ごした半世紀

読書は、生涯を通じての学習としても広く親しまれている。その目的や形態はさまざまで、1人で読むだけでなく、他人と薦め合ったり話し合ったり

する「共読」といった楽しみ方もある。それを実践しているのが「読書会」の皆さんだ。阿南市では、「新野」「桑野」「那賀川」「はのうら」の4つの読書会が活動している。中でも、1957年4月に結成された「桑野読書会」は、県内で最も古い歴史を持つ。発足当時、50人余りの会員は11人に減ったが、読書に傾ける情熱はいくばくも冷めていない。

会員同士が推薦する課題図書を各自が読み込み、毎月1回集まって感想を述べ合う。物語の背景を深く考察する人もいれば、自らの人生に重ね合わせる思いを巡らす人も。「ざつとばらんに語り合える雰囲気づくりを大切にしています」と、会長の陶久晴義さん(68歳・山口町)は熱く語る。

「1人で楽しむ読書は、好きな作家や好みのジャンルに偏ってしまいがちですが、共読をすることで本の世界が広がります。捉え方は十人十色です



本を開けば、いつも新たな発見があるという陶久さん。

が、人に伝える過程で情報が再編され、新たな発見や感動が生まれ理解が深まります。その経験が、さらなる読書につながります。読書会という「難しい本、かたくなるしい雰囲気」と誤解されがちですが、単なる本好きな仲間の集まりです。本を介して著者との出会い、読書を楽しむ人たちとの出会い、今まで気付かなかった新しい自分との出会いがそこにはあります。老若男女問わず、多くの方に参加してほしいですね」



移動図書館で本を借りる長生小学校の児童たち。棚には新しい本がたくさん。移動図書館は単に本を貸し出すだけでなく、学びの場を豊かにしている。



富岡小学校で読み聞かせをするJ P I C読書アドバイザーの田中房子さん(左・那賀川町)と保護者

1 児童図書コーナーの書架は子どもの目の高さに設計 2 表紙を見せて並べる面陳列 3 職員のアイディアが光る展示図書コーナー 4 ゆったりとした空間が自慢の那賀川図書館 5 返却された他館の本も、その場で即時貸出の対象に 6 子育ての実用本を1カ所に集めて、関連本を紹介 7 3館の担当者が集まり、購入図書について話し合う「選書会議」のようす 8 読書相談に応じる阿南図書館湯浅幸代主査司書



読書の秋、心の栄養を満タンに ③

本と人をつなぐ
市民の書棚、「図書館」



阿南図書館



那賀川図書館



羽ノ浦図書館

豊富な郷土資料と立地条件が自慢

昭和56年に開館した阿南図書館。3館の中央図書館的役割を担っている。ワンフロアが主流の現代にあって、3階建というレトロな雰囲気を楽しめる。駅やショッピングセンターにほど近い阿南市のほぼ中心に立地する交通の便の良さが売りで、利用者は3館の中で最も多い。郷土資料をはじめ、発行年が古い絵本や児童書を多く所蔵し、特に昭和56年以降に発刊された徳島新聞はすべて保存している。県内のほとんどが2年程度しか保存しない中で、その蔵書力は誇るべき財産となっている。

文化の風薫る、阿波公方の苑

開館20周年を迎えた那賀川図書館。瓦ぶきの平屋建は、室町時代に高い文化を生んだ足利将軍の末裔、阿波公方の名残を今に伝えている。蔵書数やフロアの広さは3館一。書架は高さを抑え、通路は車いすと人がすれ違える1.7mに設定されている。本以外にも130点余りの名画(複製)を所蔵し、県内で唯一、絵画を貸し出す図書館としても知られている。市民ギャラリーで定期的に作品展が行われ、中学生によるピアノ演奏など、さまざまな文化に触れられるのも、この図書館ならではの。

複合施設！子育て世代に人気

各種イベントが催される情報文化センターに併設された羽ノ浦図書館。旧羽ノ浦町時代の祝日開館(月曜日以外)を今も受け継いでいる。貸出カウンターの前には、利用者のニーズが多い時代小説コーナーを設け、DVDやビデオを鑑賞できるAVコーナーも人気だ。ガラスで仕切られたキッズルームでは、毎週土曜日に「おはなし会」が開催されている。トイレへのベビーキープ設置やベビーカーの貸出など、子育て世代が利用しやすい環境も充実している。

● 職員のさまざまな仕事
本に輝きを与える

普段、何げなく利用している図書館では、司書と呼ばれる職員たちが専門職魂をフロアに注いでいる。

図書館を訪れると、まず目に飛び込んでくるのが「展示図書」のコーナーだ。10月初旬、阿南図書館では、「秋のお役立ち本」と題してお薦め本を並べていた。「料理」「小説」「経済書」「絵本」を織り交ぜた、ジャンルに富んだラインアップになっている。普段は手にしないジャンルの本との出会いがねらい。展示図書を通じて、さまざまな分野の本に光を当てる取組は、各館が独自に行っている。羽ノ浦図書館では、ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン生誕100周年を記念して「北欧の本」を集めた。開館20周年を迎えた那賀川図書館では、当時話題になった本を年別に紹介し、懐かしい本にスポットライトを当てている。

陳列方法も本への注目を集めさせる要素の一つ。本の表紙を見せて並べる面陳列を効果的に多用する。「表紙を見せることで、本の内容がイメージできます」と話すのは、阿南図書館主任司書の松川三奈さん。「話題になる本は、何もしなくても手に取ってもらえる。でも、ちよつとアピールすることで気づいて読んでもらえる本があります。その出会いをお手伝いできれば」と、知恵を絞っている。

● 本と人をつなぐ
きめ細やかなサービス

司書の仕事は、本の選定や陳列、貸出など多岐にわたる。なかでも、本に関する調査や相談に応じるレファレンスサービスは、利用者と情報をつなぐ重要な仕事の一つ。羽ノ浦図書館主査司書の佐藤朱美さんは、「利用者とのコミュニケーションが大事です」と、インターネットとは違う「つながり」を強調する。

「知りたい内容やジャンル、目的などを丁寧に聞き取ります。それが自分の得意分野でない時は、他の職員に助けを求めることも。利用者の課題解決に「全員野球」で対応しています」

本と人をつなぐきめ細やかなサービスを提供するためには、日頃の情報収集が重要になってくる。

「新聞の広告欄や書評に目を通すだけでなく、国際情勢や芸能情報などにもアンテナを高くして、読者の関心を探っています。書籍に関する知識を深く追求することも大切ですが、読書相談では広い見識が求められます。利用者の方が、本のことを良く知っていることがありますがからね(笑)」

秋、読書を
楽しむ。



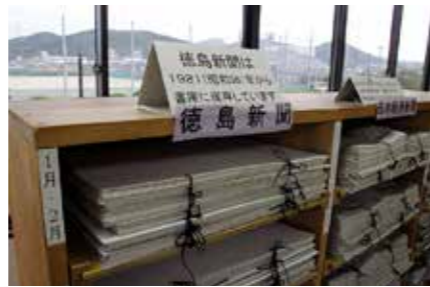
1 一日司書体験で本を貸し出す中川菜南さん(羽ノ浦小6年)と竹内恭子主任司書(あなん図書館まつり2012で上演された音楽影絵劇「100万回生きたねこ」) 2 他館への返却本を毎日回収している 3 開館時間内に返却できない方のために設置した返却ポスト 4 プリント機能付き図書検索機。操作が簡単な子ども用もある 5 プリントされた用紙には本の基礎データや所在館などが記載される 6 羽ノ浦図書館には自習スペース(33席)があり、学生に人気 7 各図書館で週末に行われている「おはなし会」の様子

県内唯一



有名画家の複製絵画130点を所蔵

那賀川図書館では、ピカソやモネなどの名画やアートポスターを数多く所蔵し、貸出も行っている。



昭和56年から徳島新聞を所蔵

阿南図書館では、昭和56年開館当初からの徳島新聞をすべて所蔵している。



移動図書館車「ひまわり号」で本を貸し出すようす

●本に親しむ楽しさを届ける移動図書館

図書館へ足を運ぶのが難しい遠隔地在住の人々のために、専用車で市内27カ所を定期巡回している移動図書館。約3千冊を積載し、図書館のサテライトとして本の貸出を行っている。移動図書館は本館同様の機能を有しており、その場で利用者カードが作れるほか、蔵書の検索や予約もできる。市の花「ひまわり」をイメージした明るいボディーカラーが印象的で、移動中はBGMを流すなど図書館のPRにも一役買っている。

が、毎回10数冊借りられる方や職場近くで予約本を受け取りたい方など目的もさまざま。中には、移動図書館そのものが大好きな子どもたちもいます。積載できる本の数は限られていますが、新刊本などを順次入れ替えているので、気軽に利用してほしい」と呼び掛けている。

●イベントとの連動で本の魅力を伝える

本の貸出以外にも図書館では、「絵本の読み聞かせ」や、保存年限を経過した雑誌や本を無料で配布する「雑誌(ブック)リサイクル」、本の魅力を伝え、読書を推進する「あなん図書館まつり」など、さまざまなイベントを開催している。イベントを開催することで、来館者や本の貸出冊数が増えるだけでなく、図書館のイメージアップにもつながる。



保存年限を過ぎた雑誌・本をリサイクル

図書館では、保存年限を過ぎた雑誌や本を、ほしいという方に無料で配布する「雑誌(ブック)リサイクル」を定期的に行っている。除籍数は年によって異なるが、子育てや料理などの実用書が人気で、役割を終えた雑誌や本に再び輝きを与えている。昨年末まで那賀川図書館のみで実施していたが、今年から3館でそれぞれ行っている。

想像以上にハード！でも勉強になりました。



一日司書になって図書館の仕事を体験

大野小学校6年生のお2人に感想を聞きました！

「どのようにして本にフィルムをかけているのかを知りたくて…。本に貼ってあるシールに興味があることも知ることができ、勉強になりました」杉本亜李紗さん(左)「図書館の仕事に興味があったので…。見た目より仕事はハードでした。本の整理は、ルールに基づいて行われていることがわかりました。手に取った本はきちんと元の位置に戻したいです」清原 星さん(右)

●いつでも、どこでも広がる本のネットワーク

2009年4月、阿南図書館が「平成21年度子ども読書活動優秀実践図書館」として文部科学大臣表彰を受賞したのを機に始まった「あなん図書館まつり」は、今年で6回を数える。毎年、読書週間に合わせて開催している。県内では唯一無二のイベントとして親しまれている。中でもピアノやバイオリンの生演奏を聴きながら、スライド映写と朗読を楽しむ「絵本コンサート」は、用意した550枚の入場整理券が数日でなくなってしまう人気ぶり。季節感を大切に、幅広い年齢層に受け入れられる絵本を職員が厳選し、演奏家が心に響く音楽と情緒豊かな朗読でその魅力を伝える。大型スクリーンに広がる絵本の世界を、家族で楽しめる一押しイベントだ。

平成18年3月の合併後、それまで各館で運用していた図書館システムを統合した。蔵書データを一元的に管理することで、「いつでも」検索「どこでも」貸出・返却が可能になった。また、自館で所蔵していない資料を他館に借用依頼したり、逆に提供したりする相互貸借ネットワークを構築することで、利便性を飛躍的に向上させることができた。その効果は数字となって表れている。四国公共図書館連絡協議会が、毎年公表している「四国の公共図書館(平成25年度)統計編」によると、阿南市の市民1人当たりの貸出冊数は8・48冊で、6年連続で四国全38市の中で最も多い。阿南図書館の岩崎館長は、「システムを統合したことなどで本の動きが活発になったのではないだろうか。利用者のリクエストにいち早く応えたいという職員の熱意と努力が、サービス向上につながっています」と話している。



カウンター前に時代小説作家コーナーを設置(羽ノ浦)



子どもたちに人気のAVコーナー(羽ノ浦)



9小中学校、3保育所、6児童クラブ、2公民館、1読書サークルへの配本や団体貸出のサービスも行っている。



「あなん」のイラスト入りライブライブラリーバッグが出来上がりました。



7



4



3



2

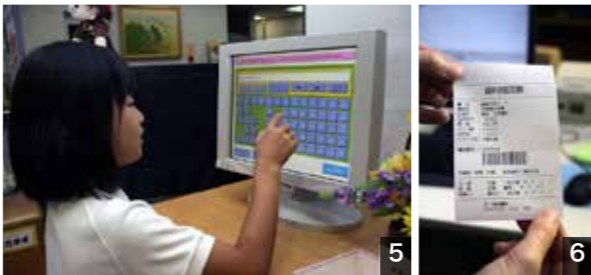


1

利用者はお客さま！「ありがとうございました」と笑顔で…



8



5



6

作家に聞く 「本との歩み、本に学んだこと」

スペシャル インタビュー
Special Interview



作家
あざの 耕平 さん
(38歳・富岡町出身・東京都在住)



絵本画家
羽尻 利門 さん
(34歳・見能林町)

「非日常」を疑似体験 絵本を介して、その魅力を分かち合いたい

——子どもにとっての絵本の魅力とは何でしょう

「旅」のようなものですね。主人公になりきり、非日常の疑似体験の中で、どんな世界も垣間見ることが出来ます。その一方で、空想の世界もまた現実の世界を基に作られていて、物語の中ではさまざまな人間模様が描かれます。成功、友情、愛、助け合い、失敗、喧嘩、悲しみ、妬み、裏切り……そして、生命の死が描かれることも少なくありません。それは、特に子どもにとって、この人間社会をのぞき見る大きな機会であると思います。

——絵本画家を志したきっかけ、その後の歩み

ある時、自分の好きな画家を並べてみると、その多くが絵本の絵を描いていることに気づき、その世界に興味を抱くようになりました。実際に絵本の絵を描いてみると、自分の絵が物語と共鳴し、あらたな命が吹き込まれたように思われ、とても感動しました。さらに、「読者」としてのみならず、「作り手」として、お話の世界にさらに入り込んでい

る感覚が楽しくて、もうやめられませんか(笑)。

——絵本づくりから学んだこと

絵本づくりには携わるようになって気づいたことは、文章や挿絵の一つ一つに作り手の強い思いが込められている、ということですね。例えば、画面の端っこに小さな蜘蛛を描くにしても、そのお話の中の季節、場所、状況において、どの種類の蜘蛛を描くのが適当か、という問いからスタートします。図書館で資料を取り寄せたり、専門の方に質問したりして、答えを探していきます。最終的に画面に描かれた蜘蛛の大きさは、小さくて判別がつかないようなものです。しかし、その作業に、読者(特に子ども)に対する責任を全うしたいという思いを込めて、絵を描いています。

——地域に根差した作品づくりから感じること

絵を担当した「二十四節気のはほん」(PHP)、「やめる、スカタン！」(小学館)の背景は、阿

南市のほか徳島県内各地をモデルに描きました。あらためて読みかえすと、日常の風景が、本の中で「非日常」の空間として現れるおもしろさを感じます。それは、先に申し上げた絵本の魅力に通ずるのではないかと思います。これからは、できる限り徳島の風景を取り入れながら本を作っていくことで、この面白さを地元の人たちと分かち合いたいです。

——絵本画家としてめざすところ

絵本の魅力は、大人から子どもへ、世代を超えて読み継がれていく点です。めざすべきは、僕の絵が今後何世代にもわたって読まれるであろう名作の中に、一つでも多く入ることです。自分はこの世からいつか消えてしまいますが、本の形でいつまでも人の役に立てる、これ以上すべきことはないと思います。加えて、微力ながら徳島で絵本画家・作家を志す人の役に立てる存在になれたらと思っています。

——子どもの頃からどんな本を読んできましたか

好きだった本ですぐに思い出せるのは、『西遊記』や『シャーロック・ホームズ』シリーズなど。その後は赤川次郎先生の作品で小説が好きになり、栗本 薫先生や田中芳樹先生、水野 良先生の作品に熱中しました。海外のファンタジー小説やSF小説も好きでしたし、今、ライトノベルと呼ばれているジャンルのものは、特に多く読みました。

基本的にフィクションが多かったですが、気になった本は何でも手に取っていたように思います。ただ、とにかく好きなものばかり読んでいたので、ジャンルは偏っていたかもしれません。

——作家を志したきっかけ、その後の歩み

作家にあこがれはありましたが、現実的になれるとは、正直なところあまり思っていないのでした。それでも小説が好きだったので、その思いが高じて自分でも作品を書くようになりまして。あとは、少しでも面白いもの、自分が面白いと思えるも

のを書こうと悪戦苦闘しつつ、書き上がったものを投稿していたら、編集部から声をかけられて現在に至っています。作家になる一番多いパターンではないでしょうか。ただ、専業作家になるまでは、9年間サラリーマンも続けていました。

——本のもつ力

本にどんな力を感じるかは、読者によつてそれぞれだと思います。私にとつては、一番はやはり「娯楽」としての力でしょうか。面白いから読むものが、本だと思えます。

そして、本は読めば読むほど、それまで思いもしなかったような、さまざまな「面白さ」を体験することが出来ます。その、今までと違う面白さを求めて次の本を読み、また新しい面白さを見つけられるという「娯楽としての深み」が、本のもつ力だと個人的には思っています。

——あざのさんにとっての図書館と書店

一番本を読んでいた時期は学生時代ですが、そのころは、ならずと2日で1冊ぐらい読んでいたように思います。当然、図書館や学校の図書室は愛用していました。書店にも毎日のように通っていました。あの頃はどこに行くにも必ず本を持ち歩き、ちよつとでも時間があればページをめくっていました。そのため、本を手取るのも、ほとんど補給感覚でした。図書館や書店は、ごく当たり前の日常の一部でした。

——作家としてHappyになる

私はかなり自分本位な作家なので、一番は自分が面白いと思えるものを書くということになります。ただ、プロとしてやっていくには自分だけが面白いものではダメなので、自分が好きなものを書くために、自分が好きなものがいかに面白いかを読者の皆さんに伝えたいと思います。日々精進しています。いつか、これは傑作です、と胸を張って皆さんに言えるような作品を物にしてみたいですね。

学生時代に面白さを実感



本との出会いが、生きる勇氣と力に。
心の本棚にある数々の名作の中から、
私の一番の「バイブル」を紹介。

8月に実施した「阿南市立図書館利用者アンケート」にご協力をいただいた方の中から、16人の皆さんに“お薦めの一冊”を紹介していただきました。



主人公が好男子で、剣を持っては向かう敵なしという決定的な時代小説です。最高権力者の圧力に耐え、立ち向かう姿が心を打ちます。

森野 茂利さん
(76歳・那賀川町)



初めての育児でいろいろと辛く、しんどかった時期に読んで感銘を受けました。明るく楽しく破天荒な育児に肩の力が抜けてきました。

山下 蘭さん
(33歳・大湯町)



元商社マンとしてあこがれます。著者の感性と通じるところがあります。数ある本屋大賞受賞作品の中でもお薦めです。

植田真一郎さん
(65歳・新野町)



イトーヨーカ堂の創業者ですが、その心掛けに感銘を受けました。プロ意識の高さを学び、仕事に向き合う姿勢が変わりました。

葉田 正敏さん
(65歳・富岡町)



「百聞は一見にしかず」。読んでくださいますの一言に尽きます。生老病死…生きていくことの意義が凝縮されています。

谷本ゆかりさん
(黒津地町)



無報酬で極限の死刑囚に寄り添う僧侶。「幸福な家庭はどこも同じだが、不幸な家庭にはそれぞれ不幸がある」という彼の言葉に胸を打たれた。

天野 晴美さん
(67歳・羽ノ浦町)



歴史ものといえば、剣術に秀でた人物や将軍、軍師などがテーマのものが多いですが、この本の主人公は異質で面白いと思いました。

上竹 美和さん
(39歳・日開野町)



論語の本はたくさんありますが、一番わかりやすく書かれているのがこの本ではないかと思えます。人生の指針が見つけれられると思います。

富田 卓実さん
(47歳・長生町)



女子高生3人組が人気作家のサイン本を手に入れるため、超ディープで専門的な歴史トークバトルを繰り広げるところがおもしろいです。

坂口 敦司さん
(32歳・羽ノ浦町)



かつて母に読んでもらった本です。お風呂に入るのが苦手だった娘と一緒に読むことで、好きになってくれました。絵本の力はすごい！

阪井めぐみさん
(35歳・見林町)



死に対する畏敬の念、生への尊厳、人間の存在の本質は本来どうあるべきかを考えるきっかけになりました。

河井 信巳さん
(56歳・津乃峰町)



世界平和を祈る意味でも、国際交流が戦争の最中だったことに驚きました。感動し、涙があふれました。

中西 順子さん
(63歳・橋町)



「刹那」と「切ない」は辞書に並記され、そこに「美と運命」を見てしまったら、トニオにおたずねを。芸術の世界をめざそうとする若者に薦めたい一冊です。

山崎 一成さん
(62歳・西路見町)



人生の教訓本です。なぜ人間は生きるのか、何を目標に生きるのかを与え、教えてくれます。その答えは、「利他の心」と「足るを知る」ことです。

内田 純二さん
(55歳・羽ノ浦町)



中学2年の女の子をモデルにした作品で、「いじめられる人」の気持ちがつつられています。読み進めるたびに涙が止まりません。

伊丹 稀星さん
(13歳・那賀川町)



小学6年の時、「ぼくらシリーズ」に夢中になりました。中でもこの本は、物語の展開が速く、わくわくさせてくれました。

中西 滉さん
(14歳・畷町)



民の力、公の役割 「読書文化の未来を語る」

スペシャル トーク
Special talk

那賀川図書館 館長補佐

櫛谷 友己さん

(55歳・見能林町)

徳島県書店商業組合 理事長

平野 惣吉さん

(61歳・富岡町)



「紙の文化」を守り続けて275年 読書という地域の文化的インフラ整備を牽引

書店は、世の中のことを深く知る情報基地であり、知性の象徴でもある。ところが昨今、地域にある小さな書店がどんどん姿を消しているという。7月31日付の『徳島新聞』朝刊に、「姿を消す中小書店 県内、15年で4割が廃業」という衝撃的な見出しが躍った。雑誌を扱うコンビニエンスストアの増加やインターネット通販の台頭など、書籍の購入方法の多様化に加え、消費税増税が影響しているとみられている。書籍の販売を生業とする書店商業組合にとって、由々しき問題である。

「本県に限らず、全国各地で有効な対策が見いだせないまま、書店の減少が続いています。こうした傾向は海外でも顕著で、フランスでは、インターネット通販における送料無料サービスを禁止する法律が作られるなど、書店を保護する動きが開始されています。日本でも何らかの手立てが必要だと感じています」

平野さんが経営する株式会社平惣は、1739年（元文4年）に創業。親子8代にわたって「紙の文化」を守り続けてきた。地域に根差した書籍販売等を通じて、本と人をつなぎ、読書という地域の文化的インフラの整備に力を注いでいる。

「幼少期から本に親しむことはとても大切です。弊社もその役割の一端を担うべく、10年以上前から『絵本のおはなし会』を開催しています。業界では『朝の読書』を推進しており、実施校は全国で2万7000余りに達しています」

街の書店では、本との出会いを演出するさまざまな工夫がなされている。平惣阿南センター店では、サッカー日本代表の長友選手のサイン入りユニフォームを展示して、読者の運動意欲や健康志向を誘引している。ワールドカップイヤーにちなみ、そのコンセプトが新しい。

「単に本を売るだけでなく、その先の楽しみも提供できれば……。例えば、有名作家を招いてイベントを開催すれば、ファンも増えるはず。出版社とのつながりのある書店だからこそできる取組を、積極的に展開していきたいですね」

全国に目を向けると、さまざまな読書環境づくりが行われている。官民が連携した取組もその一つ。「図書館と街の書店はどちらも地域の読書環境に欠かせないが、読書という文化的なインフラをどう支え、高めていくのか模索していかなければならない」と言葉に力を込める。

「心血注いだ著書には、それなりの対価が払われたいと有能な作家が育ちません。あこがれの職業として読者から敬愛されるという出版業界のしくみをどのように維持していくのか。民の力、公の役割を融合した、持続可能な読書環境づくりを進めていく必要があると思います」

時代は流れ、インターネットでいくらでも情報が手に入られる便利な世の中になった。一方で、若者の活字離れが進み、「紙の文化」の衰退が懸念されている。「漢字にはそれぞれ意味があります。それらを理解し、活字文化を残していくためには、『紙の文化』を守らなくてはなりません。本に限らず書写、絵画、手紙、はがきなど、紙でしか表現できないものはたくさんあります。『消費の時代』にあつてデジタル化の波に押されがちな紙ですが、『心の時代』へと変わる時、あらためてその良さが見直されると考えています」

「今までも、そしてこれからも『紙の文化』を大切に守りながら、地域に愛され親しまれる書店であり続けたいと考えています」

住民の方に、本を通じて心豊かな生活を送っていただくために、図書館はこれからのようなサービスを行っていけばいいのだろう。今後のあり方を模索する前に、図書館本来の役割について確認しておきたい。「図書館には4つの役割があります。1つは、地域の情報拠点としての役割、2つ目は、地域の情報や資料を保存し活用する役割、最後に、住民の生涯学習を支援する役割です。阿南市立図書館でも、住民の知る自由を保障し、無料で資料を提供することを基本とし、貸出業務やレファレンス業務を通じて住民への資料提供を行うことで、利用者の課題解決につなげています」

これからの図書館サービスを考える上で、利用者のニーズを把握しておくことが重要である。今年8月に実施した利用者アンケートの結果から、今後の方向性を見出ししてみたい。

「アンケートは、3館において1カ月間実施し、611人の方から回答をいただきました。図書館サービスに対する満足度については、『職

員の対応』で80・1%、『貸出規則』では71・2%の方が満足であるとの回答が得られたのに対して、『読書相談』では40・9%、『インターネット利用サービス』にあつては31・8%と、十分ではないことがわかりました。また、今後の図書館に望むこととして、『司書職員おすすめ本の紹介』『新刊書や専門書の充実』『休館日の相互調整』『開館時間の延長・拡大』『ホームページの充実』『阿南図書館のリフォーム』といったさまざまな声が寄せられました。総合的には、9割近くの方から『非常に満足』または『やや満足』との評価をいただいたものの、いくつかの課題点も見つかりました。こうした利用者の声を踏まえ、どのようにして図書館サービスや地域の読書文化の振興につなげていけばよいのだろうか。

「情報化社会の進展により、利用者のニーズは高度かつ多様化しています。図書館としては住民の期待にできる限り応えていきたいと考えています。例えば、インターネット環境の整備や利用者の相談に対応できる人材の育成および資料の整備に努

めるとともに、増加する高齢者の図書館利用を促進するためのサービス（例えば、宅配サービス）など、利用者の状況を踏まえたサービスを展開していきたいと考えています。また、築34年が経過し老朽化が進む阿南図書館を、市の中央図書館としてふさわしい施設とすることも大きな課題です。

平成25年度の図書館の利用者登録率は26・4%で、増加傾向にあるものの、4人に1人しか利用者がカードを持っていないのが現状です。利用者の拡大を図るためには、地域の状況に応じたサービス体制の確立とともに、広報紙の発行やインターネット等を活用しての情報発信が求められます。市民の図書館利用が活発になることで、読書人口が増え、地域の読書文化を維持、発展させていくことにつながります。図書館本来の役割を踏まえつつ、信頼される図書館、快適な空間づくりに努め、市民の皆さんとともに読書文化の未来を創造していきたいと考えています」

来館者の裾野を^{すそ}広げ 市民が集う憩いの場に



知的体力をつけて 心豊かな人生を送りたい

●復興の書店で実感した 本の持つ「力」

本の持つ「力」をあらためて実感させられた出来事があった。2011年3月26日、『朝日新聞』夕刊に「やっ」と読めたワンピース」(2)と題したワンピース」(1冊1000人立ち読み)という小さな記事が掲載された。舞台となったのは、東日本大震災後、雑誌の配送が止まっていた仙台市の塩川書店。1冊の『少年ジャンプ』が回し読みされているという記事は、ネット上などでも評判となり、塩



抜粋 2011年3月26日付『朝日新聞』夕刊

川書店には全国から同誌や『少年マガジン』『コロコロコミック』といったマンガ雑誌が次々に届けられた。「数百人が読んだ最初の1冊は、ぼろぼろで印刷もかすれていました」と、店主の塩川さんは振り返る。震災の恐怖に震える子どもたちに、せめてマンガや絵本を見せてあげたい。山形で『少年ジャンプ』を購入した、とあるお客さんから譲り受け、「ジャンプ読めませう」と貼り紙したところ、母親たちが子どもを連れてくるようになったという。「連載の続きを読ませたいということではなく、余震におびえている子

どもの気持ちを落ち着かせたいという一心だった」と。シヨックを受けて震えていた子どもたちが、マンガを読むうちに少しずつ子どもらしくさを取り戻していきようすは、1冊の本の持つ「力」をあらためて実感させるものだった。

●書店や図書館通いで 知的体力をつけて

本は、物事を知るための情報源になるだけでなく、人生を深く考えるきっかけになることに加え、前向きに生きようとする人の心の支えにもなり、モチベーションを与えてくれる。そんなパワーを持つ本が集積された書店や図書館は、まさに知性の集積地であり、向上心の源といえる。

そうした場所に通う習慣を身につけることで、「知的かつ精神的な変化が表れる」と提唱しているのが、『世界一、書店通いをした』という教育学者の齋藤 孝さんだ。自身の著書『10分あれば書店に行きなさい』メディアファクトリー(新書)で、本を読むこと

の意義を熱く語っている。「書店や図書館は、良書が無数に積み上げられていたり、書棚に収まっていたりする。そこにある1冊1冊には、古今東西の偉人たちの叡智と労力が注ぎ込まれている。いわば、現世に生きる人類の知的エネルギーが集積されている場所といえよう。そういう場所に行つて刺激を受けたいはずがない。例えば、新刊が出るということは、そこには既刊本にない新たな知見なり事実なりが記されているはず。それを知らずに生きるというならば、随分もったいない気がしないだろうか。『1日最低10分』はきわめて厳しいノルマのように思えるが、実はそうではない。続けていると体が慣れてくるからだ。書店通いを毎日続けることで、「知的体力」を維持することができる。日常のなかで小さな10分だが、継続すると偉大な10分になることを約束したい」と。



●読書の秋、 心豊かな人生の旅路に

10月27日から読書週間が始まった。「読書離れ」がいわれて久しいが、今こそ書物の効用を見直し、本に向かうように呼びかけたい。

読書週間は、終戦まもない1947年(昭和22)年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで、「読書の力によって、平和な文化国家をつくらう」という決意のもと、出版社や書店、公立図書館、新聞・放送のマスコミが加わって第1回読書週間が実施された。その後、文化の日を中心にした2週間(10月27日～11月9日)と定められ、国民的行事として定着している。2005年には、読書週間の初日を「文字・活字文化の日」とし、国民の大切な財産として、その振興が図ら

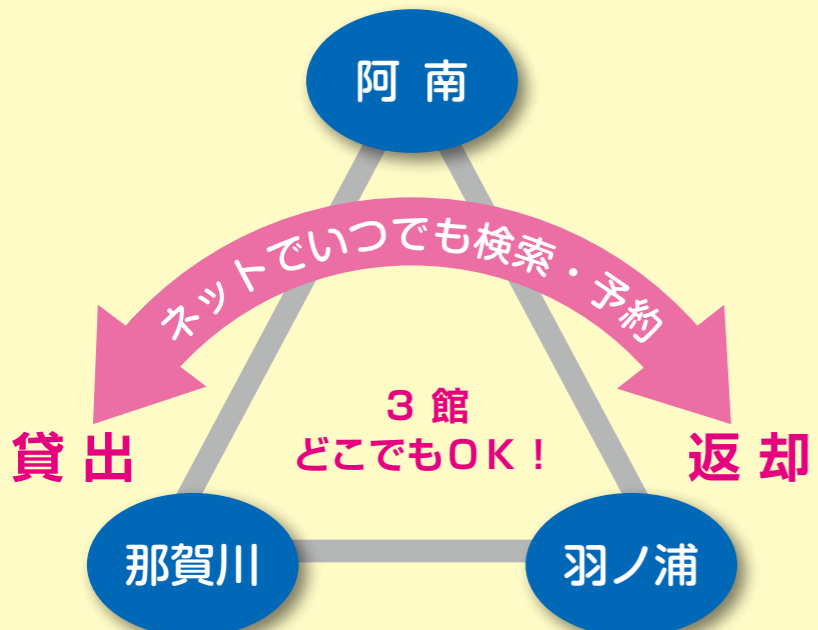
れてきた。国の力は文化力であり、人間力である。そして、それを支えているのが活字文化であることを、戦後の歩みから学び取れる。

インターネットの普及により、情報伝達の流れは大きく変容した。ネットである程度は調べられるが、体系的に学べるのはやはり「本」である。人間性を育て、形作る「読書」が、情報化社会においても重要な役割を果たしていくことに変わりはない。そのことを改めて見つめ直す機会にしたい。

食べ物は体の栄養
本は心の栄養
食べないでは体が育たない
読まないでは心が育たない
いつかの講演で耳にした文句である。読書に最適な秋、心の栄養を満タンにして、豊かな人生の旅路につきませんか。

図書館の利用案内

開館時間、休館日、問い合わせは、27ページをご覧ください。



開館時間外の返却は、館外に設置している返却ポストをご利用ください。なお、CD、DVD、ビデオテープ、絵画はカウンターへお返しください。

図書館 Q & A

- Q. 利用者カードを作るには?**
A. 市内在住または市内に通勤・通学されている方は、どなたでも作成することができます。登録時には、住所および通勤・通学先が確認できるもの(健康保険証、運転免許証、社員証、学生手帳など)をご持参ください。
- Q. 貸出期間を延長したいときは?**
A. 貸出期間中にお申し出ください。1度だけ延長することができます。期間は、手続きをした日から2週間です。電話でも受付可能です。
- Q. 借りたい本等がない場合は?**
A. 貸出中の場合は予約できます。お探しの本等が所蔵されていない場合は、リクエストしてください。他の自治体の図書館から取り寄せるなどして、できる限りご要望にお応えします。
- Q. 貸出履歴は残りますか?**
A. 残りません。読書記録を残したい場合は、貸出レシートをご活用ください。